

「普通道德」と「最高道德」のあいだ

—実存と超越をつなぐもの—

人間学研究室

研究助手 竹中 信介

私たちは、どうすれば心の底から「自己」の境遇を受け入れて、「安心」して生きていくことができるのか。まずこの点を大きな問いとして提示したい。

モラロジーの創健者・廣池千九郎は、『道德科学の論文』(以下、『論文』)の随所で、「安心」や「安心立命」という言葉を用いている。今回は、その「安心立命」の境地を「最高道德」の地平として捉えることにしたい。また、その境地に至る道行きには、「普通道德」という従来の次元の道德があるが、それを踏まえてこそ「最高道德」の特色が明瞭になると考える。

『論文』では、「普通道德」と「最高道德」の違いとして、ただ一点、「精神作用」の相違が挙げられている。従来の「普通道德」の形式を重視しつつ、道德実行上の精神を「自己本位」から「神の慈悲心」へ改めることが「最高道德」の主眼とされる。

そこで提示する論点は以下である。実際の道德実行の場面で、無理なく、「安心」して「自己本位」から「神の慈悲心」へと改めることができるのかどうか、という問題である。ほとんどの場合、「自己」中心的な心と「他者」への慈悲心の「あいだ」を揺れ動き、葛藤があるのではないだろうか。

そのような立場を立脚点とするならば、普通道德から最高道德への道筋はどうすれば明確に見えてくるのだろうか。その道標(道しるべ)として、今回特に注目するのは、廣池の「自己反省」と教育人間学が専門の下程勇吉の「絶望的自覚」という心理作用である。

まず、「自己反省」とは何を意味するのか。廣池の「自己反省」論を検討すると、反省する際の標準が、「伝統(ortholion)」つまり自身の恩人の系列の思いや願いに適っているかどうか、という点に定められていることが注目される。これは「自分の精神作用の善悪」如何を問題としないのが特徴であり、「真の自己反省」と言われるものである。

一方、「絶望的自覚」とは何か。まず、下程によれば、「絶望」には2種類あり、自暴自棄に陥る負の側面を持つものと、「自己」の至らなさを正面から受け止める積極面を持つものである。この後者の積極的な「絶望」に基づく「絶望的自覚」によって、悟りや諦めの境地、言い換えれば神や仏につながる地平が拓けるとされる。

両者の特色が明らかになったところで考察すべきは、どちらがより「安心」や「安心立命」の境地に無理なく到達することができるのか、という問題である。結論的には、「自己」の精神作用の内部で終始しがちな「絶望的自覚」よりも、「伝統」という「自己」の外部が軸となっている「自己反省」のほうが有効性を見出したい。

その理由は、「自己」以外の「他者(伝統)」との対話によって、自己の位置付けを冷静に、客観的に捉えることが可能であるからだ。そこから、焦りや不安といったものが、少しずつ和らいでいくのではないだろうか。今回、「他者」として捉えたのは「伝統」のみであるが、その他に兄弟や友人、先輩・後輩等も、「自己」に接する重要な「他者」であるため、そこでの「対話」から「安心」の境地が生まれる、という可能性も見据えておきたい。